

【原著】

## 現代高校生の進路選択における入試の位置づけ

山村滋，鈴木規夫，濱中淳子（大学入試センター研究開発部）

我が国の入試改革は，偏差値偏重による選抜から，大学と学生とのより良い相互選択を目指して展開されてきた。本稿では，入試多様化政策は，高校生にどのような進路希望校選択をさせようとしているのか，そして現実には，どのように高校生は進路選択をしているのか，をそれぞれ政策文書，調査データから明らかにし，今後の改善の方向性を探求する。

### 1 はじめに

能力・適性，興味・関心等を多様な方法・多角的な尺度により測るといふ我が国の大学入試多様化政策は，偏差値偏重による選抜から，「大学と学生とのより良い相互選択」を目指して展開されてきた。本稿の目的は，近年の入試多様化政策を検討し，今後の改善のための示唆を得ることにある。

分析は次の順に行う。まず，1991年の中教審答申『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について(答申)』や1997年の中教審答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第2次答申)』を踏まえ，「選抜から相互選択へ」の総括的な提案を行った1999年の中教審答申『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』が，多様な入試方法を，高校生の進路選択にどう位置づけようとしたのかを分析する<sup>1)</sup>。次に，現代の高校生が，進路選択において何を重視しているのか，そこにおいて多様な入試方法は，どのように位置づけられているのかを調査データによって明らかにする。最後に，以上の分析をもとに，改善のための筋道を考察する。

分析に利用する調査データは，大学入試センター研究開発部試験基盤設計研究部門が2010年11～12月に実施した『高校生の進路についての調査』で得られたデータである。同調査は，全国の高校・中等教育学校から約10%を単純ランダムサンプリングによって抽

出し，高校3年生1クラス分について回答をお願いした。調査対象の506校中，444校の協力(444/506=87.7%)を得られ，15,315人分の回答を回収することができた<sup>2)</sup>。今回は，このデータの中から四年制大学進学希望者(9,254名分)のものを利用する。

### 2 中教審答申(1999)の進路選択モデルと入試方法

まず，中教審答申(1999)が進路選択をどのようにすべきと考え，入試をどう位置づけようとしていたのかを把握する。答申は，我が国の中等教育・高等教育の現状を，「それぞれの多様化，個性化が進みつつある」<sup>3)</sup>が，「高等学校卒業時点で大学に進学する際には，依然として少しでも『よい大学』を目指そうという意識が残っており，その意識が同一線上での競争を生み出していることが大きな問題であり，「偏差値という単一の基準により『入れる大学』を選択するという意識」があるとの現状認識を示している。そしてこれまで，大学入学者選抜の改善のために「過度の受験競争の緩和を目指し」，選抜方法の多様化，評価尺度の多元化などの取り組みが行われて来たが，「入学希望者と大学側の最適な相互選択の実現のために一層の改善が必要であり」，その実現のために大学側，受験生側に以下のことを求めている。

大学側は，「個性化」することを前提に，「当

該大学（学部・学科）の教育理念，目標に適した資質を持つ学生を見いだせるように「入試方法等」を「改善」することである。受験生側は、「偏差値という単一の基準によるのではなく、「自己の能力，適性，意欲，関心に最も適した教育を受けられる条件を備えた大学（学部・学科）を選択することである」。このように大学・受験生双方の役割が示されている。そしてアドミッション・ポリシーが重要であると示し，大学入学者の選考にあたっては，「選抜機能に偏った入学者選抜ではなく，学生の求めるものと大学が求めるものとの適切なマッチングが必要であり，「学部・学科等の募集単位ごとに入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）を示した上で，多様な入試を行うこと」が大学に求められた。一方，受験者側に求められたのは，「自らの将来の職業選択等を見据えつつ，各大学が提示する入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）を参考とし，自らの能力・適性等に適合した大学，学部，学科等を選択していくこと」である。

以上の主張を，高校生の進路選択に位置づければ下のようなになる（図1）。大学は，個性化・特色化したうえで，教育理念等に適合したアドミッション・ポリシーを明確にし，それを入試方法に反映させる。受験生側は，まず「自己の能力，適性，意欲，関心に最も適した教育を提供」してくれる大学（学部・学科）を見定め，次に「自己の能力，適性，意欲，関心」等を適切に判定してくれる入試方法を

採っている大学（学部・学科）を選ぶ。すなわち，まず大学の教育内容に照らして大学を選び，次に入試方法に照らして大学（学部・学科）を絞り込むのである。

### 3 高校生の進路選択の際の重要基準

#### 1) 進路選択の際の重要な基準の把握方法

実際には，高校生は，進路選択にあたって何を重視しているのだろうか。ここでは，一対比較法によって進学希望の高校生が進路決定をする際の基準の重要度を把握することにした（図2）。進学先を具体的に選ぶときの基準として①「学校の魅力」（四年制大学進学希望者の場合は，大学の魅力と同義），②「合格可能性」，③「入試方法」，④「進学にかかるお金」（経済的負担），を設定し，一対比較法により重要度の回答を得ることとした。さらに，①の「学校の魅力」に関しては，a. 「なにを教えているか」（教育内容），b. 「どれだけ有名か」（知名度），c. 「どこにあるか」（所在地），について同様に一対比較法により重要度の回答を得ることとした。

②の「合格可能性」は，大学に合格しようとするならば，進路（志望校）を決める際の重要な要素の1つと考えられる。③の「入試方法」は，上述の中教審答申で各大学が教育理念等に基づいて定めるべきものとされている。④の「進学にかかるお金」は，進路決定の現実的な重要要因として不可欠のものである。①の「学校の魅力」の中身は，上述の中教審答申で言われている「教育内容」とも

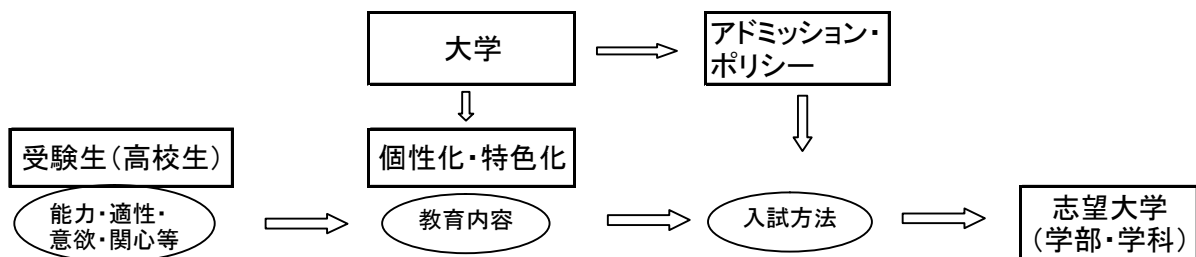


図1 中教審答申(1999)の進路選択モデル

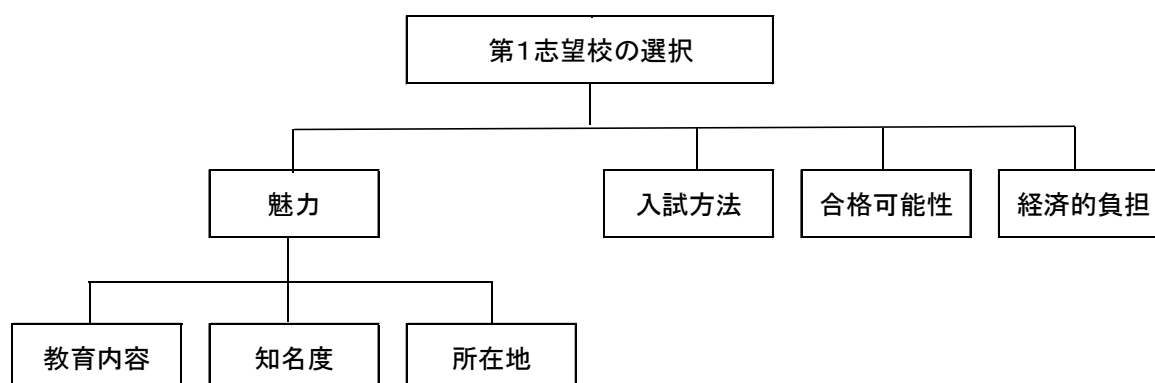


図2 一対比較法による進路選択の基準モデル

に、学歴社会の1つの象徴である「知名度」、および、自宅通学を考慮して「学校の所在地」とした。そして、進学先を選ぶ基準については、4つの項目の重要度の合計が1になるように基準化した。同様に学校の魅力に関しては、3つの項目の重要度の合計が1になるように基準化した。

## 2) 全般的傾向

詳細な分析に入る前に、まず、全般的傾向を把握しておくことにする。表1は四年制大学進学希望者に関して、進路先を選ぶときの四つの基準に関して何を重要とするかの平均値を示したものである。最も重視するのは「学校の魅力」であった。続いて「合格可能性」、「進学にかかるお金」、「入試方法」の順となっている。なお、「合格可能性」と「経済的負担」の重要度はほとんど同程度であった。

表1 進路先を選ぶ基準

学校の魅力	合格可能性	入試方法	経済的負担	N
0.302	0.267	0.164	0.266	9,012

さて、一番重視される「学校の魅力」の中身に関しては、3つの項目の重要度は、表2に示すようになった。「何を教えているか」（教育内容）がもっとも重要であり、続いて

「どこにあるか」（所在地）、「どれだけ有名か」（知名度）の順となっている。「何を教えているか」と2番目の「どこにあるか」の重要度にはかなりの差がある点が注目される。進路決定において教育内容を重視しようとする姿勢がうかがえる。一方、「どれだけ有名か」は3つのなかではもっとも重要度が低かった。「どこにあるか」という所在地の方が、「知名度」より重視されているのである。

表2 学校の魅力

教育内容	知名度	所在地	N
0.441	0.258	0.301	9,067

## 3) 進路先を選ぶ基準の類型化とその分布

上で見たように「学校の魅力」のうちもっとも重要なのは「教育内容」であった<sup>4)</sup>。また「合格可能性」は、高等教育の大衆化とともに普及していった偏差値（中村 2011）が代表的なものであろう。このことを前提とし、「中教審答申(1999)に基づく進路選択モデル」の視点を踏まえて、各回答者（四年制大学進学希望者）の進路選択の重要度をパターン化し、その分布をみていこう。その際、「中教審答申(1999)に基づく進路選択モデル」には経済的な視点は入っていないので、ここでも「経済的負担」の重要度は除外して、「学校

の魅力≡教育内容」,「合格可能性」,「入試方法」の3項目のそれぞれの得点に基づき,順序情報に変換する。たとえばある回答者の得点が,「学校の魅力」=0.452,「合格可能性」=0.150,「入試方法」=0.235,（「進学にかかるお金」=0.163）であったとすると,この回答者の重要度は,「魅力>入試方法>合格可能性」となる。このような方法で回答の分布を示したものが表3である<sup>5)</sup>。

表3 進路選択の際の優先順序パターンの分布

優先順序	%	N
①「魅力>合格可能性>入試方法」	29.8	2,684
②「魅力>入試方法>合格可能性」	8.6	777
③「合格可能性>魅力>入試方法」	17.7	1,597
④「合格可能性>入試方法>魅力」	11.7	1,058
⑤「入試方法>魅力>合格可能性」	3.1	280
⑥「入試方法>合格可能性>魅力」	3.3	301
⑦「魅力>合格可能性=入試方法」	7.4	668
⑧「合格可能性>魅力=入試方法」	3.0	274
⑨「入試方法>魅力=合格可能性」	0.7	61
⑩「魅力=入試方法>合格可能性」	0.6	58
⑪「魅力=合格可能性>入試方法」	5.2	471
⑫「合格可能性=入試方法>魅力」	1.6	143
⑬「魅力=合格可能性=入試方法」	7.1	640
合計	100.0	9,012

もっとも割合が大きいのは,①「魅力>合格可能性>入試方法」型であり,「学校の魅力」を最優先し,次に「合格可能性」を考慮する。「入試方法」は,相対的にはあまり重視しない,というタイプである。これは約3割を占めている。教育内容等の魅力を最優先し,その中から「合格可能性」に照らして進路希望先を決めようとするのは,現実的なパターンであろう。

次に割合が高いのは③「合格可能性>魅力>入試方法」型であり,17.7%である。このタイプは,まず「合格可能性」を重視しその中から教育内容等を考慮し,「入試方法」にはあまりこだわらないというタイプであり中教審答申(1999)が「進路選択における現状」と

して問題視したタイプである。

この次に大きな割合を占めているのが④「合格可能性>入試方法>魅力」型である。このタイプは,「合格可能性」を最重要とする点では,上の2番目のタイプとかわらないが,教育内容等よりも「入試方法」に照らして志望先を決定しようとするタイプである。このタイプも「合格可能性」を最重要と考えている点で,やはり中教審(1999)が問題と考えているタイプに該当するといつてよいであろう。

四番目に割合が大きいのが,②「魅力>入試方法>合格可能性」型である。教育内容等を第1に重視し,次に「入試方法」を考慮する点で,中教審(1999)が望ましいとしているものに該当する。このタイプの割合は8.6%である。このタイプに近いものとして⑦「魅力>合格可能性=入試方法」型がある。「魅力」を最重要とし,「入試方法」と「合格可能性」を同等に勘案しながら進路希望先を決定するというタイプであり,その割合は7.4%と5番目に大きい。

上述のように中教審(1999)の奨励するタイプ②は1割に満たない。少なくともこの数値に基づくかぎり,政策意図どおりに進路希望先を決定している高校生は決して多くはない。

一方,「合格可能性」が最優先のタイプは③④⑧であり,合計でその割合は32.4%とほぼ3分の1を占めている。また,「魅力」をもっとも重視するタイプとしては,①②⑦があるが,これらの合計で45.8%となる。高校生の半数弱は,大学の教育内容等をまず考慮して進路希望先を決定しているのである。

また,「入試方法」の順位付けに注目すると,「入試方法」を最優先とするタイプとしては⑤⑥⑨があるが,合計で7.1%である。それに対して,「入試方法」を3番目,すなわち3つの基準のなかではもっとも重視しないタイプは,①③⑩の合計で52.7%である。このように「入試方法」は「魅力」や「合格可能性」に比べ,進路選択にあたってあまり重視され

ていない。また、「合格可能性」が「入試方法」に優先するタイプは①③④⑧⑩であり、合計で67.4%に達する。このことは、以下のように解釈できるであろう。たとえば、①のタイプの場合、「魅力」をまず優先し、次に「合格可能性」を重視して進路希望先を決定する。「合格可能性」が高いのが、たとえば指定校推薦であれば、指定校推薦で受験する。つまり、「入試方法」は、「合格可能性」に付随して決まるのである。

しかし、推薦入試やAO入試は多面的な評価尺度により志願者の多様な能力や適性等を判定することをその理念としている。推薦入試やAO入試での受験を志向している高校生は、「入試方法」を重視しているということはないのだろうか。

#### 4) 「もっとも真剣に準備している入試方法」と進路選択の際の優先順序

表4は、優先順序の13のパターンのうち、出現率が5%以上のものに限定して、「もっとも真剣に準備している入試方法」と優先順序のパターンをクロス集計したものである。この表から見る限り、指定校推薦、公募推薦、AO入試を志向している生徒が、「入試方法」を2番目に重要とする②や④において特に割合が大きいという傾向はみられない。またそ

もそも入試方法をより重視するパターンそのものが、この表には含まれてこない。つまり、彼らは特に推薦入試やAO入試という「入試方法」にこだわりを持っているとは言えないであろう。

#### 4 おわりに

以上の分析結果は以下のようにまとめることが出来る。第1に、「学校の魅力」、「合格可能性」、「入試方法」、「経済的負担」という4つの選択基準のうち、「入試方法」は平均的にはその重要度はもっとも低い。第2に、「学校の魅力」とは「教育内容」によるところが大きい。第3に、「学校の魅力」、「合格可能性」、「入試方法」の重要度に基づく、「学校の魅力」≡「教育内容」に照らして志望先を絞り、その中から「合格可能性」により選択・決定する生徒が13のタイプ中、もっとも多い。第4に、中教審(1999)が望ましいと考える、興味・関心・能力・適性等を踏まえ教育内容をまず重視し、次に適性等を適切に判定してくれる大学(学部・学科)を選ぶというモデルと合致するのは1割弱である。第5に、「合格可能性」を最重視するタイプ—偏差値に基づく進路選択として問題とされてきたタイプはこの中に含まれる—は、合計で約3割を占めている。第6に、「合格可能性」を「入

表4 「もっとも真剣に準備している入試方法」別の優先順序パターンの分布

入試方法	①	②	③	④	⑦	⑩	⑬	合計	N
	魅力 ∨	魅力 ∨	可能性 ∨	可能性 ∨	魅力 ∨	魅力 ∥	魅力 ∥		
	可能性 ∨	方法 ∨	魅力 ∨	方法 ∨	可能性 ∥	可能性 ∨	可能性 ∥		
	方法	可能性	方法	魅力	方法	方法	方法		
指定校推薦	32.9	8.6	23.4	14.8	6.3	5.3	8.6	100.0	1,197
公募推薦	31.8	10.2	20.7	13.8	8.2	7.8	7.5	100.0	1,408
AO入試	32.5	13.8	15.9	12.3	10.3	4.7	10.5	100.0	535
一般入試	35.7	9.4	20.1	12.5	8.9	6.0	7.5	100.0	4,192
全体	34.2	9.7	20.4	13.1	8.4	6.1	7.9	100.0	7,332

魅力:学校の魅力 可能性:合格可能性 方法:入試方法

試方法」よりも重要としている場合は多いが、受験生は「合格可能性」をも含めて「大学入試」と捉えているとみなせば、多くの高校生は、「大学入試」において「入試方法」は「合格可能性」に従属したものと位置づけており、「合格可能性」とのからみから「入試方法」を選んでいえると言えよう。以上のように、中教審答申(1999)が示したモデルのような形で進路決定を行う高校生は多くない。その理由を実証的に明らかにするのは今後の課題であるが、大学進学は今日でも社会経済的な地位達成のための大きな手段であることを考えれば、たとえば「合格可能性」を最優先する高校生がいなくなることはありえないであろう。

以上の分析結果からは、大学入試の改善との関わりで次のような示唆が得られる。

まず検証されるべきは、進路選択において様々な優先順位づけによって大学に進学した学生が、その後、大学での学びにどう適応し、どのように学業を達成しているのかを明らかにすることである。

様々なパターンの学生間で、適応に大きな相違がないのであれば、上述の中教審モデルと現状との乖離を問題にする必要はないということになる。

一方、問題があるのであれば、入試方法・評価基準等の見直しはもちろんであるが、大学が提供する教育内容や理念等、そしてそれらに基づく入試方法が、志願者(高校生)側に十分かつ明確に伝わっていないということも考えられるので、十分な情報提供を進めて教育内容・入試方法を選択してもらう努力をすべきであろう。こうしたことを踏まえた上で、たとえば「合格可能性」を最優先して入学してくる学生は必ずいるという前提の下に、入学者に対して教育的に努力することにより、不適応者問題に対応することが求められると言えよう。

## 注

- 1) 翌 2000 年には、大学審議会より『大学入試の改善について(答申)』が公表されたが、「選抜から相互選択へ」の方針に変化はない。なお、その後の中教審答申では、入り口管理(入学者選抜)から出口保証へと改革方針の重心は移っている(木村 2008)。
- 2) 同調査は、進路希望、進路選択における意識や行動、受験行動、学習状況、社会観等に関する質問項目から成っている。詳しくは山村他(2011)を参照されたい。
- 3) 括弧内は中教審(1999)からの引用。以下の括弧内も同様。
- 4) 表 3 で分類した 13 のタイプ別に「魅力」の 3 項目について重要度得点を調べたところ、いずれのタイプにおいても「教育内容」の得点が一番高かった。
- 5) 「経済的負担」を除外することによって数%程度の順位変動が生じたが、「中教審答申(1999)に基づく進路選択モデル」との比較を行う上では分析結果に影響はない。

## 参考文献

- 中教育審議会(1991).『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について(答申)』.
- 中央教育審議会(1997).『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第2次答申)』.
- 中央教育審議会(1999).『初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)』.
- 大学審議会(2000).『大学入試の改善について(答申)』.
- 木村拓也(2008).「格差を拓げる入試制度はどのように始まったのか?—日本におけるオープンアドミッション・システムの淵源」.『Journal of Quality Education』1, 91-113.
- 中村高康(2011).『大衆化とメリトクラシー—教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』. 東京大学出版会.
- 山村滋・鈴木規夫・濱中淳子(2011).『高校

生の進路についての調査——第一次報告  
書』大学入試センター.